



セミの羽化、そしてセミの不思議

セミの羽化見たことありますか？ あんなに小さな幼虫から、セミが出てくるなんてびっくりですよ。巣穴から出た幼虫は、よちよちと歩き出します。羽化する場所を探して歩きます。動かなくなったら、



そこが羽化する場所になります。背中の中の中央が縦に割れて背中があらわれます。背を丸めるようにして殻の割れ目を広げ背中・胸・頭・前足を殻から抜きます。体をのけぞらせて体重を利用して殻の口を広げていき足を抜き終わります。羽が少しずつ大きくなっておしりを残したまま、体を起こして抜け殻にとまります。その間、1時間から2時間かかります。羽は、青味をおびています。朝までに乾かして、天敵のない時間に飛び立ちます。なんて神秘的なのでしょうか？ 何度見ても感動します。生命の尊さを思います。

木もれ日の森でよく見かけるセミは、**アブラゼミ・ミンミンゼミ・ニイニイゼミ・ヒグラシ・ツクツクボウシ**。それに最近では**クマゼミ**の声を聞いたと言う人もいます。セミは昆虫の中でもっとも大きく鳴く虫です。セミは私たちにとって、最も身近にいる昆虫なのに知らない事が沢山あると思いませんか。ちょっと知っておくとセミを見た時に親近感がわくような不思議をあげてみたいと思います。

＊ セミの成長は羽化をする前にさなぎの時がない不完全変態です。

＊ セミの一生は、卵がふ化するのに 300 日ぐらい、幼虫として地下で暮らすのが3年から7年ぐらい、羽化してから2週間ぐらいと言われています。長いと合計して8年ぐらいになります。種類によっても違いますが、くわしい事はあまりよくわかっていません。実は、長生きの昆虫なのです。

＊ 幼虫は木の根の汁を吸っています。木の根の汁は養分がわずかだそうです。成虫は、木の師管から栄養分のある樹液を吸っています。

＊ 天敵、卵時代は卵に卵を産み付けるセミノタマゴヤドリバチ。幼虫時代は、セミタケ菌・モグラ・ケラ・ゴミムシなど。羽化の時は、スズメバチ・アリなど。成虫時代は、ヒヨドリ・カラスなどの鳥類、そして人間。セミも大変です。

＊ セミの抜け殻の白い糸状のものは、へその緒？ 違います。気門と呼ばれる空気の取り入れ口があり、その気門から空気を体内に取り込む管が白い糸状のものです。

セミが好きな樹木は何。羽化する場所はどうやって決めているの。羽化するときの高さは。抜け殻の止まり方は。巣穴の残土処理は、、、などなど。今年の夏は、子どもに戻ってセミの研究をしてみませんか？ (高橋)



夜の自然観察

木れびの森の樹木(27)

森の木々は春の新緑の時期は劇的に変化しました、盛夏の今頃はあまり変化がなく深緑一色に見えますが、枝先等を観察すると青い実が育っているのが見えます。クヌギ、コナラのどんぐり、ミズキの小さな球形の多数の果実は上向きに、エゴノキの実は1個から数個下向きに垂れ下ってつき、いずれも青い小さな可愛らしい実がついています。7月中旬には自宅の近くの森に群生している**ボタンクサギ**に淡紅紫色の小さ



い実がついています。7月中旬には自宅の近くの森に群生している**ボタンクサギ**に淡紅紫色の小さ

な花が半球状に集まって咲いていました(7月中旬)。中国南部原産で観賞用に栽培されたものが野生化したものではないかと思われます。

今号の低木はヤマコウバシとシュロです。



ヤマコウバシ(山香し、別名モチギ・ヤマコショウ)はクスノキ科クロモジ属で主に関東地方以西の山地に生育する落葉低木で高さ3~5mになり、樹皮は茶褐色、小さな皮目があります。葉は互生。葉身は長さ5~10cm、全縁で波打ち光沢がなく、質はやや厚くてかたい感じです。

若葉を乾燥して保存し、熱湯で戻して食べた昔の保存食です。名前は枝葉によい香りがすることによって由来します。

シュロ(棕櫚、別名ワジュロ)はヤシ科シュロ属。常緑高木で高さ5~10mになります。九州地方の暖地に自生していたものが広く植栽され森の各所に野生化しています。幹は暗褐色の繊維におおわれ、葉は葉柄が長く葉の裂片が折れて垂れ下がります。花は雌雄別株、5~6月黄白色の小さな花を多数つけます。茎の先にらせん状に群がってつきます。葉がシュロより小さく裂片が折れ曲がらないのが**トウジュロ**(唐棕櫚)です。葉柄も短いので区別がつかます。

シュロの用途は葉鞘の繊維は縄やほうきなどの利用、材は鐘をつく撞木に使われます。(林)



シュロ

木もれびの森の野鳥たち 8月

<猛暑の夏、野鳥たちは・・・>

猛暑が続く中、鳥たちは早起き。4時前後にカラスが鳴きだし、続いて**メジロ**の元気なさえずりが30分位続きます。日中、今年生まれのくちばしのつけ根の赤い若いカラスたちが、散策路の柵に乗ったり降りたり、気まぐれ?のように何かをついばんだりして、まるで遊んでいるようです。

7月に入って散策路を歩くと、落とし穴のように所々に径5cm前後の穴が掘られているのに気がつきます。カラスは不思議にもセミの幼虫が地中から這い出てくる位置を探り当て、太いくちばしで地面に穴を開け、幼虫を捕らえているようです。

小さな小鳥、**シジュウカラ**や**メジロ**・**コゲラ**・**エナガ**などの幼鳥は群れとなって、高い木の葉がよく繁った上方で虫探し。獲物を見つけると器用に葉先にぶら下がったり、すばやく飛びついてキャッチ、「食べることは生きること」を身につけたようです。そんな時、猛禽類の**オオタカ**や**ツミ**が来て一声二声鳴くと、突然小鳥たちは静まり返り、一斉にどこかへ姿を隠してしまいます。

コジュケイは日中の暑い中、林の淵の斜面にできた土砂を利用して砂浴び。お椀型の窪みにお腹を沈め小さく羽ばたき、体についた寄生虫を落としているようです。

キビタキや**ウグイス**は居残って遅くまでさえずり、繁殖はどうだったでしょうか?

9月、渡り鳥にとっては移動の季節。繁殖を終え、南の国へと、また旅が始まります。木もれびの森にも休憩地として立ち寄っていくことでしょう。(瀬尾)



シジュウカラの幼鳥